

平安・鎌倉時代の 信仰と生活

令和6年度
秋季ミニ展示

—都にあこがれた在地領主たち—

はじめに

奈良盆地中央に位置する田原本町は、大和川水系に挟まれた肥沃な耕地が広がる田園地帯として弥生時代以来人々が生活し続けてきました。

この田園地帯で徐々に力を付けてきた在地有力者は、平安時代後期から中央の貴族と「荘園」の寄進という形で関係を築き、在地領主としての権威付けを回りました。そして、貴族の力が衰えはじめると、寄進先を興福寺に替えるようになり、興福寺が実質的な大和の領主のような形になっていきます。

今回のミニ展示は、在地領主が中央貴族の都での生活を模倣し、信仰文化にまでその影響が及ぶようになった状況を、発掘された資料からたどります。

11～12世紀の十六面・薬王寺遺跡

十六面・薬王寺遺跡は田原本町中央付近、寺川と飛鳥川に挟まれた沖積地に立地します。この遺跡の中央には中世の在地豪族「保津」氏の城館跡と推定される「保津氏居館推定地」が広がります。発掘調査から、13～14世紀の環濠をもつ城館跡を確認し、多数の井戸などから生活関連遺物や茶道具などが出土しています。

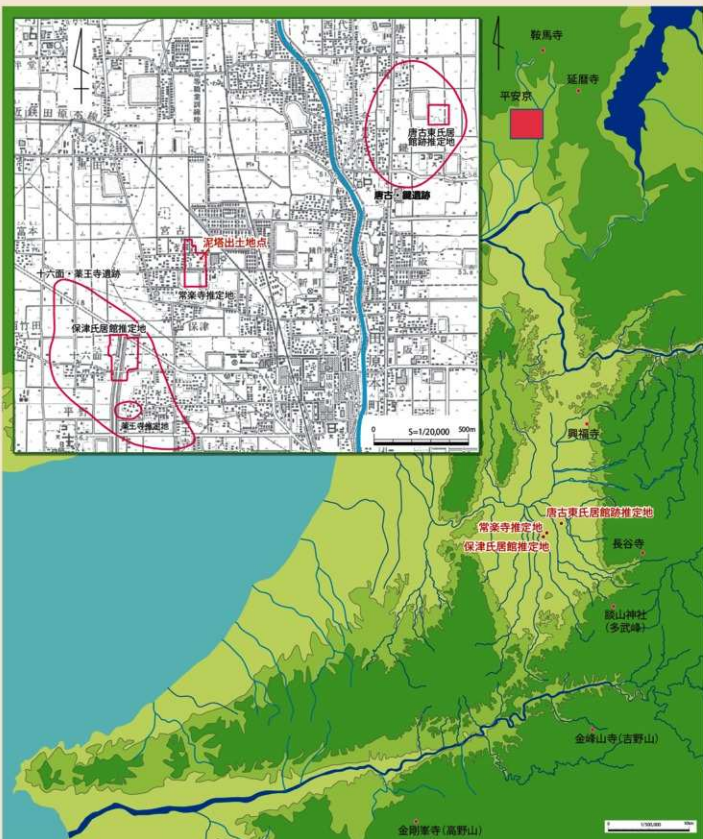
十六面・薬王寺遺跡では、平安時代後期に遡る遺構も数多く確認しています。特に、保津氏居館推定地の南西側100m付近、現十六面集落内で実施した21次調査では、井戸から扇や箸、墨書土器など在地領主の存在を想定させる11世紀頃の遺物が出土しました。

保津氏居館推定地の北西端で実施した第50次調査では、13世紀頃に埋没したとみられる環濠の上層から、凝灰岩製の宝塔などがほぼ完全形で出土しました。平安時代後期～鎌倉時代初期頃に遡る遺物とみられます。この時期の凝灰岩製宝塔は、鞍馬寺の経塚出土資料程度しか判例が知られていない希少なものです。なお、石材は香川県の火山石が使われていることが奥田尚氏の分析で判明しています。歴数墓に使われたものが、経塚のようなものが付近に祀られたのは判りませんが、中央貴族の信仰活動を地方在地領主も模倣しようとしたことがわかります。

末法の世を迎えようとしていた平安時代後期の人々にとって、経塚のような形で仏教の思想を後世に伝えることは大きな功徳と考えられていました。十六面・薬王寺遺跡の北東に隣接する保津・宮古遺跡付近(常楽寺推定地)では泥塔が多数出土しており、こちらも同様の信仰活動の痕跡と考えることができそうです。

※経塚 仏教の経典を埋納して後世に伝えるために金銅や陶器の容器に仏典を納めて埋める風習が平安貴族の間で大流行した。ほとんどの経塚は有名寺院に近い山間部に埋納された。

※末法 平安時代に大流行した、釈迦入滅後千年で仏教の教えがせんと伝わらなくなる「末法」の到来をおそれる思想。



令和6年度秋季ミニ展示

平安・鎌倉時代の信仰と生活 —都にあこがれた在地領主たち—

会期：令和6年9月21日(土)～11月24日(日)

会場：田原本町生涯学習センター2階廊下(唐古・鎌考古学ミュージアム前)

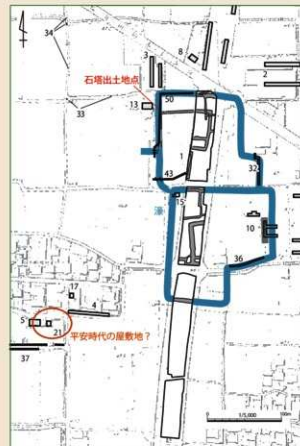
関連事業：講演会 令和6年10月14日(月・祝) 13:00開場 13:30開演 於：生涯学習センター2階研修室

「田原本町の平安時代末～鎌倉時代初期の集落と遺物」清水琢哉(田原本町教育委員会)

「十六面・薬王寺遺跡出土の石塔を探る—紀伊の平安～鎌倉時代の石塔から考える—」北野隆亮氏(和歌山市わかやま歴史館)

唐古・鎌考古学ミュージアム
奈良県磯城郡田原本町大字手233-1

発行：令和6年9月21日
印刷：株式会社新社



十六面・薬王寺遺跡のこれまでの調査成果と城館遺構

国道24号バイパス建設工事におこなわれた第1次調査では、平安時代～中世末の遺構が多数みつかりました。特に室町時代前後には高周を築いて囲む城館を営んだことがわかりました。付近の小字名から、保津氏の居館と推定されています。



十六面・薬王寺遺跡第50次調査出土 石塔笠部(上) 宝塔 塔身(右)

出土した石塔部材は、火山礫凝灰岩からつくられたもので、平安時代末～鎌倉時代初め頃の製作と推定されます。



香川県さぬき市 火山(津田の松原海岸から)

香川県の火山は平安時代から鎌倉時代にかけての有力な凝灰岩の産地でした。海岸に近く搬出に便利だったのでしょう。



宮古出土泥塔

宮古集落の北東で、泥塔が多数出土しています。高さ10cm前後の外型づくりで、底に穴があるものが見立ちます。経塚の埋納が流行した平安時代後期頃に、多数の泥塔を埋納する行為もおこなわれたようです。



参考:鞍馬寺地内出土(国史館蔵) 鞍馬寺本堂付近の経塚上に置かれていたという香川県火山産の凝灰岩でつくられた宝塔



唐古・鎌遺跡出土 平安時代後期～鎌倉時代はじめの土器

上は田中庄の屋敷地部分の59次調査で確認した井戸出土白磁碗(11～12世紀)と5次調査井戸出土黒色土器碗・土師皿(10世紀)です。下は26次調査で木製樽とともに出土した12世紀の瓦器碗です。

「田中庄」と在地領主のはじまり

弥生時代の集落遺跡として有名な唐古・鎌遺跡ですが、重複して中世の豪族居館とされる遺跡も確認されています。

唐古地の東側には20m四方の畑地などが点在する区画があり、中世の文書にみられる「唐古東」氏の居館跡と推定されています。この城館跡とみられる遺構が拡がる地区の小字名は「田中」といい、延久二(1070)年の興福寺の荘園を記録した「興福寺大和国雑役免付帳」という文書から「田中庄」という荘園が周囲に広がっていたことが判明しています。荘園の領域が比較的まとまっていることから、在地有力者が円田化(散在していた荘園を一つの地区にとりまとめていく行為、私領化につながる)を順調に進めていたことがわかります。

この荘園は、長保元(999)年に田中庄荘官である文春正という人物とその一党が大和国司の使者を殺害する、という事件の舞台となり、その記録が残ったことで関係者の名前が現代に伝わる貴重な例となっています。なお、この時の田中庄の名目上の荘園領主となっていたのが紫式部の夫として知られる藤原重孝です。

1070年代には、貴族の衰退と興福寺勢力の伸長の影響からか、興福寺を荘園領主と仰ぐようになりました。999年の在地領主文春正の子孫が在地豪族に成長したのか、在地領主の交代があったのかは判っていませんが、文春正のように国司の干渉を武力で抵抗するような在地領主の存在が地方勢力の母体となったのかも知れません。



田中庄の範囲(昭和28年米軍撮影写真に合成)

写真:国土院

竹田北庄や糸井北庄などが点在する地域ですが、田中庄は、一か所にまとまっています。一つの私領が形成されつつあったことを示すものかもしれません。

